

東条左衛門尉景信

「殿様、近頃日蓮法師のうわさが大変やかましゅうございますが、お耳に達しておりますでしようか」

「いかなることか申してみよ。まさかこの東条の郷におるのではなかるうなあ」

「それが、その生家に帰っておりますのでございます」

「なになに、小湊の村にきておるのか。馬鹿者奴、なぜ早くそれをいわぬ」

「はい。よく確かめましてからと思っておったのでございます。小湊村も以前とは変わりました、近頃は取り調べにことをかくような始末でございます」

「なぜだ。なぜ小湊村の様子がわからないというのだ。小湊村は東条の領地ではないのか、領主が自分の領地のことかわからなくてどうするのだ。思えば十二年前の建長五年の四月二十日の夕、この東条左衛門尉景信、不覚にも、あの日蓮坊主を討ちました口惜しさは今に忘れるものではない。まことにあの坊主こそ弥陀の怨敵、稀代の仏敵じゃ」

「お殿様……お言葉中でおそれいりますが、その阿弥陀様の尊い念仏を、今あの小湊村では唱えるものが一人もおらなくなりました」

「ええ。また、そりやどうしたことだ。それも、あの坊主の仕業というのか」

「さようでございます……恐ろしいものでございますなあ」

「馬鹿、馬鹿、感心しておる時ではないぞ。して、また、なんで一寸の間に、そのようなことになったのじゃ。くわしく申してみよ」

「はい……そのことについて詳細にとり調べてまいりました。たしか、先月のことかと存じますが、彼の日蓮法師が生家に帰ったのでございます。その時、ちようど、母親が息をひきとった時だそうでございます。すると、日蓮法師は、庭先から、御題目を声たかだかと、

南無妙法蓮華経

南無妙法蓮華経

……………」

「これこれ汚らわしい。その南無妙……とかは、そう力をいれないでもよいわ。ほどほどにして
おけ」

「さようでございますか。話が日蓮法師の話でございますので、いくらか殿様の前ではありませんが、日蓮法師は庭先で、声たかだかと

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

.....

と唱えましたとは申し上げかねます。南無阿弥陀仏だったら、日蓮法師の母親は本当に死んだでございましょう。ここはどうでも、南無妙法蓮華経と申しあげませんと、話が申しにくくなりませう」

「ええい。うるさい奴、その唱えごとは、略して話せ。南無阿弥陀、南無阿弥陀、耳が汚されるわ。して、そしたらいかがしたのじゃ」

「母親に日蓮法師の唱えた南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経……」

「ええい。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。その南無妙……とかはやめておけ」

「これをいわないでは、話に調子がでません。南無妙法蓮華経……」

「.....」

「と、唱えますと、不思議や、母親は生き返ったのでございます。さあ、そうなると、大変でございます。このこと、疾風のように村中に知れわたったのでございます。ところが、当時村には病人が多く、かてて加えて、雑魚一匹も浜ではとれぬという不漁続きでございました。そんな法力が、わが村に生まれた日蓮法師にあるのなら、村だすけになることだ。一つ御祈禱をしてもら

つて、村中を助けてもらえと、誰かが、いいだしたのだそうですが、日蓮法師は頼まれると、さつそくに、わが家の前から船に乗って、南無阿弥陀仏と書いた旗をたてまして……」

「馬鹿つ、それは南無妙法蓮華経という旗ではないか」

「ようく、ご存知でございますなあ。その旗じるしでございます。あまり、南無妙法蓮華経というなどご命令なので、遠慮しまして南無阿弥陀仏と申し上げました」

「そんなついでしうはいらぬこと。して、その後いかがしたのじゃ」

「南無妙法蓮華経と書いた旗を船の舳先に立てました。日蓮法師は、船を小湊の浜にそつて、進めますと、お殿様、失礼いたします。こう申し上げませんと話に力が入りません。」

日蓮法師は

南無妙法蓮華経

南無妙法蓮華経

南無妙法蓮華経

南無妙法蓮華経

……………」

「もう、やめておけ……」

「いえいえ、唱え始めだしますと、なかなか、一寸やそつとでばやめられないのが、このお題目

でございます。

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

私めも、あまり唱えておる中に、ナンマイダよりは、なんだかありがたいような変な気持ちになつてまいりました。妙なものでございますなあ、お殿様……」

「何をくだらんことをいう。日蓮坊主の話はいかがしたのじゃ」

「はい……たつたそれだけのことで、村中からは病人は一人もいなくなり、不思議なことにそれからは大漁つづきだそうでございます。こんな法力を現わされたんでは、南無阿弥陀仏などと唱える者が一人もいなくなるのは、当然でございます。お殿様……」

伊勢大神宮ニ寄進シタテマツル御厨、壹処、安房国東条ニアリ

右ノ志ハ、朝家安穩ノ為奉ツル私願ノ成就ノ為メ、殊ニ忠赤ヲ抽ンデ、寄進シタテマツルノ状件ノ如シ

寿永三年五月三日

正四位下前右兵衛門左源朝臣

これは聖人がお生まれになった貞応元年よりもようど三十八年前のことであるが、頼朝はこの東条の御厨（伊勢大神宮にそなえる魚采の料地であつて、鎌倉時代が最盛で近世には煙滅した。魚采に代える後世には米をもつてするようになった。）を寄進して八年後に、征夷大將軍になつておる。故にこの東条の御厨は神驗あらたかとしてこの地方の信仰をあつめ、また、この地方の人の自慢の種であつたらしい。

聖人もこの東条の御厨は、御自分の生家に近い御厨として尊重されておる。すなわち、

「日蓮は日本国の中には安州のものなり。総じて彼国は天照太神のすみそめ給ひし国なりと言へり。かしこにして、日本国をさぐり出し給う。あはの国御くりやなり、しかも、此国の一切衆生の慈父悲母なり。かかるいみじき国なれば、定んで故ぞ候らん。いかなる宿習にてや候らん。日蓮又彼の国に生れたり、第一の果報たるなり」（弥源大殿御返事全集一二二七ページ）と、東条の御厨の近いところに生れた事を果報とされており、また開宗に當つては、

「去る建長五年四月二十八日に、安房国長狭郡之内東条の郷今は郡也。天照太神の御くりや、右大将家（源頼朝）の立て始め給ひし日本第二のみくりや（第一は武州の飯倉）今は日本第一なり。此の郡の内清澄寺と申す寺の諸仏坊の持仏堂の南面にして、午の時に此の法門申し始む」

（聖人御難事全集一一八九ページ）

云々といわれ、東条の御厨を誇りとされておるのである。

ところが、この東条の御厨の給人（神宮と御厨との中間を斡旋する人）であり、地頭職をしておるのが、東条左衛門尉景信であった。

東条左衛門尉は、聖人が、清澄寺において、念仏無間の法門を口にするや、たちまちに聖人の敵となり、その日その時から、聖人の首を狙う人となった。しかも、この首の狙い方は尋常一様のものでなく、実に徹底していたのである。念仏を悪口する憎き僧侶として聖人を狙うということもあつたらうが、それ以外に、実は重大なる利害関係が伏在しておつた。

聖人のお筆として安房国長狭郡東条の郷今は郡なりと前述にあるが、長狭郡は北条朝時の領地であつた。聖人を伊豆の伊東に流罪に処したのは、北条重時、長時の親子であつたが、北条重時は、自分の兄である北条朝時の死後、安房の国長狭郡の朝時の領地を、自分のものにしようと狙つていたのである。朝時の妻は夫の死後、後家尼となつて、夫の領地を守りつづけていた。後家尼はいかなる故か、聖人のご両親に恩をかけ、聖人も後家尼よりいろいろとお世話になつておるのである。従つて、領地のことについては、聖人がじかじきに、鎌倉の間註所に行かれて、後家尼に有利な証言をしたので、後家尼の領地は重時のものにならなかつた。

重時の命を受けて、安房国の現地で直接働いたのが、東条左衛門尉であつた。聖人が得度をした寺、千光山清澄寺の坊地も山林も、あわや東条左衛門の支配下となろうとしたのだが、鎌倉における、聖人のはたらきによつてことなきを得たのである。

こんな利害関係があるので、聖人の首を狙う東条左折門は真剣であつた。

しかも、重時は四年前に死に、その子執権職長時も今年の八月（文永元年）に死んでしまつた。故に聖人さえ亡き者にしたならば、安房国の長狭郡一帯は、東条左衛門尉の思いのままになるのであつた。東条左衛門尉景信が聖人を念仏門徒の仇敵とするのは表面の理由で、実は、その影にこんな重大な理由があつたのである。だからこそ、三百人の同勢を引きつけて、小松原に聖人を襲撃するという、小松原の法難が起つたのである。